

3. 上気道の炎症と生活習慣病

多田 靖 宏（公立大学法人福島県立医科大学耳鼻咽喉科学講座）

1. 目 的

従来の耳鼻咽喉科疾患の中で、明らかに炎症性反応が検出される疾患以外のもので、現在もその原因が明確となっていない疾患、またウイルス感染による炎症の関与など複数の説が唱えられている疾患が多数ある。その代表的なものは、突発性難聴やメニエール病などの内耳性疾患、顔面神経麻痺などである。その他、睡眠時無呼吸症候群や病巣感染症などを含む扁桃・咽頭疾患、アレルギー性鼻炎や慢性副鼻腔炎、鼻性真菌症などの鼻副鼻腔疾患においては、症状が軽微な場合は炎症が存在しても通常の検査では検出困難で見逃されていた可能性がある。近年、血液中高感度CRP（hs-CRP）が検出可能となり、従来では測定困難であった軽微な炎症を明らかにすることが可能となっている。今回われわれは上気道領域の各種疾患におけるhs-CRPやサイトカインを指標にして、その治療効果判定や予後の予測が可能となるか、また糖尿病や動脈硬化などの生活習慣病との関係を調べることで危険因子になるかを明らかにする。さらに上記の耳鼻咽喉科疾患においても同様に、軽微な炎症がいかに関わっているかを調べる。

2. 対 象

平成16年7月より平成19年3月までに当院および公立藤田病院耳鼻咽喉科で加療を受けた、突発性難聴、メニエール病、顔面神経麻痺、睡眠時無呼吸症候群、病巣感染症、慢性扁桃炎、アレルギー性鼻炎、慢性副鼻腔炎、鼻性真菌症などと診断された患者とする。年齢制限無し、性別不問、患者の同意が得られたものとする。

3. 方 法

同意の得られた患者に対し、まず入院時採血もしくは術前検査の採血時にhs-CRPなどの採血（約8ml）を併せて行う。その後、非腫瘍性疾患に対しては臨床症状や局所所見の変化に伴って採血を行う。可能な範囲で術後もしくは症状消失により退院となった約2ヶ月後に採血を行う。また、基本的に保険適応外の検査項目については患者に負担をもとめないこととした。

主な観察および測定項目は下記の通りとした。

①手術予定の場合：肥満歴、糖尿病、高血圧の家族歴など問診項目、身長、体重など身体

計測的項目や体脂肪分布。血圧など理学的所見。糖代謝、脂質代謝、肝機能、腎機能、血算、hs-CRP、糖脂質代謝と合併症に関与する因子、炎症関連因子、尿所見。

②手術予定なしの場合：肥満歴、糖尿病、高血圧の家族歴など問診項目、身長、体重など身体計測的項目や体脂肪分布。血圧など理学的所見。（糖代謝、）血算、hs-CRP、糖脂質代謝と合併症に関与する因子、炎症関連因子、尿所見。

（非手術例もステロイド剤投与予定の場合は糖代謝関連検査は行う。）

4. 結 果

57名より採血を行った。年齢は14歳から87歳で平均49歳。男性41名、女性37名。内訳は、コントロールとして基礎疾患を持たないもの11例、顔面神経麻痺17例、突発性難聴9例、喉頭気管狭窄症7例、慢性副鼻腔炎5例、副鼻腔嚢胞性疾患3例、鼻アレルギー3例、その他2例であった。57名のうち、治療後に採血を行うことができたのは20名であった。

基礎疾患のあった症例は9例のみで、高血圧5例、糖尿病4例であった。理学的所見として特記すべき事項のある症例はみられなかった。

hs-CRPの値をみると、コントロール群で平均0.078 (mg/dl)、疾患群の治療前で平均0.114 (mg/dl)、治療後で平均0.080 (mg/dl)であった。

5. 考 察

今回の検討では、症例別ではそれぞれの母数が少なかったため全体として評価を行なった。その結果、治療前のhs-CRPの平均値と比較し、治療後のhs-CRPは明らかに低下しており、疾患の発症には炎症の関与があった可能性を示唆するものと考ええる。

疾患別の母数を更に増やし、それぞれの疾患においてhs-CRPのみならずサイトカインも含めて検討することができれば、一定の頻度で軽微な炎症が出現しており、症状の増悪・緩解にあわせて、それぞれの数値が変動するという結果が得られると考えている。病態の把握がさらに厳密に行えるようになれば、治療の適応やタイミングを計ることが可能となり、今後の臨床に貢献できるのではないかと期待している。

6. 謝 辞

本研究は、財団法人福島県労働保健センターの産業医学、産業保健調査研究助成によって行われた。